

【ワークショップレポート】

ゴミ拾いから地域を考え対話するワークショップ@鷺沼駅

2015年11月3日、国際大学グローバル・コミュニケーション・センター（以降、国際大学 GLOCOM）は、川崎市の環境総合研究所、株式会社ピリカ、NPO 法人グリーンバードの協力を得て、鷺沼駅前レンタルスペースにて「ゴミ拾いから地域を考え対話するワークショップ」を実施しました。10:30 にスタートし、昼食を挟んで 16:00 に終了。参加者全員で鷺沼駅周辺の路上ポイ捨てゴミの状況を調べ、それを踏まえて路上ポイ捨てゴミを減らすアイデアを考えました。体験型ワークショップの様子をレポートします。

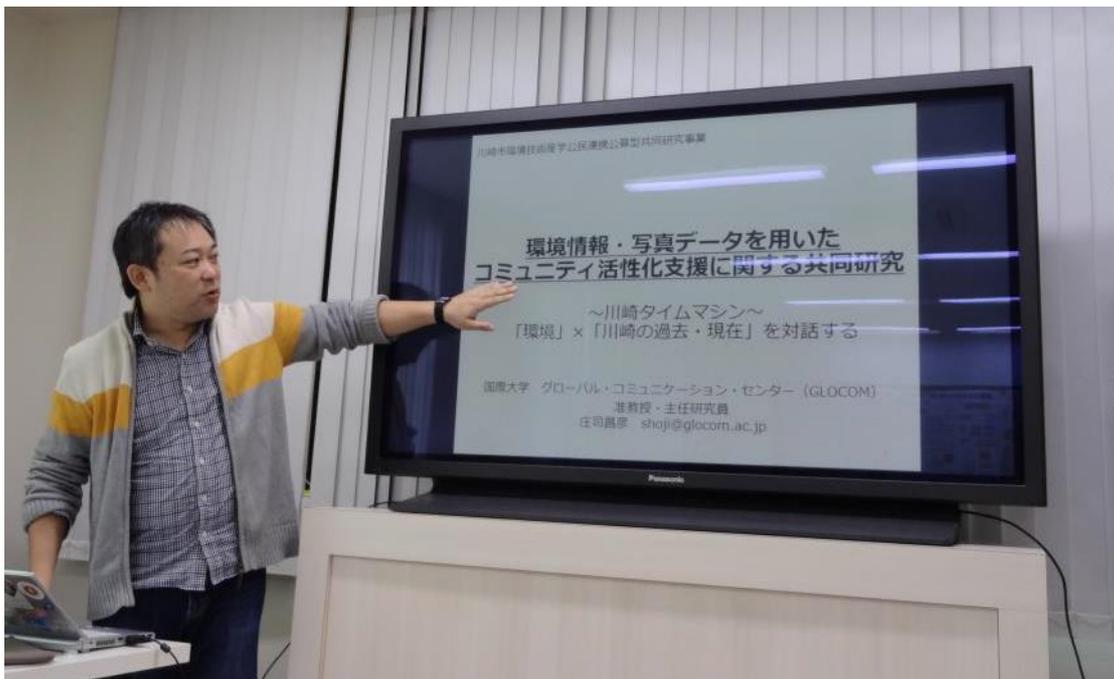
●ワークショップ実施の背景、目的

このワークショップは、ゴミのポイ捨てという身近な問題を題材に、地域の環境美化のあり方を考える目的で実施されました。

GLOCOM の主任研究員・准教授の庄司昌彦氏は、「かつては公害の町といわれた川崎市も、今ではとても住みやすくなりました。それは地域の人たちの努力があったからです。今後 少子高齢化が進行すると、例えばゴミ捨て場など、身近な環境のメンテナンスができなくなる事態にもなりかねません。そういったときに、課題を解決するためには、きちんとコミュニケーションが取れる人間関係が重要」と主張します。地域住民の関係を維持・発展させていくために庄司准教授が着目したのが、「環境情報データ」と呼ばれる、写真や動画、数値などのデータ。これらのデータをどのように活用すれば、住民間の「環境コミュニケーション」の活性化に役立つかを、2014 年から研究しています。

今年は、過去の資料を探してくるだけでなく、現在の状況を知るためにゴミ拾い調査を実施。「実際に調べてみることで地域の特徴がわかります。川崎市の地域力が低下して環境が悪化するということにならないように、できる貢献を考えていきたい」と庄司准教授は話します。

今回のワークショップでは、地域改善のカギとなる環境コミュニケーションの素材として、路上ゴミが実際にどの程度落ちているかを自分たちで調べ、定量的に評価し、どうすればゴミのポイ捨て問題を解決できるかについて対話を通して考えました。



ワークショップの趣旨について説明する GLOCOM の主任研究員・准教授の庄司昌彦氏

●過去の資料からみる川崎市のゴミ問題

庄司准教授からワークショップの趣旨について説明があった後、川崎市環境総合研究所の木下佳也氏が挨拶し、参加者が順番に自己紹介を行いました。それから、ゴミの路上ポイ捨て問題を考える上での材料として、市内の写真愛好家が撮影した写真データや、川崎市が過去に制作した市政ニュースの映像を視聴しました。



川崎市のゴミ問題に関する過去の写真を提示する国際大学 GLOCOM の菊地映輝氏

川崎市が市政広報活動で作成してきた映像には、過去の取組みを振り返る上で参考になる素材が多く含まれています。菊地氏によると、1964年の東京オリンピックを控えた1960年代初めより、全国的に美化運動が活性化したとのこと。こうした美化運動が始まる以前は、日常的にゴミのポイ捨てが行われており、道路には紙屑やタバコの吸い殻が散乱していました。また当時は、箒で集めたゴミを清掃員がリヤカーで回収するシステムでした。実際、菊地氏が示した1954年の川崎銀座街の写真をよく見ると、道路の端にゴミが落ちているのがわかります。

その他、川崎市が全国で初めて導入した機械式のゴミ収集車のニュースや経済成長に伴って増加するゴミ処理を自動化するために新設された処理センター、公共の場所へのゴミ箱設置と美化を呼び掛けるパレード、普通ゴミとして焼却処分していたペットボトルの分別に関するニュースなどを視聴しました。こうした映像の数々からは、半世紀以上にわたって川崎市が公共の場所の美化活動に取り組んできたこと、ゴミのポイ捨て問題は1960年代から継続しているテーマであることがわかります。

参加者たちは、これらの映像を見て気づいたこと（3点）を付箋紙に記入し、グループ内で共有しました。あるグループでは、「以前は町全体での清掃活動があったが、今はない（マンションは管理会社による清掃）」「昔は清掃活動を通して近所の人々のつながりがあったのではないか」「オリンピックで“外の目”を意識していたのが日本人らしい」「美化活動に7000世帯が参加したのはすごい。ご近所の力を感じた」といった話が出ました。

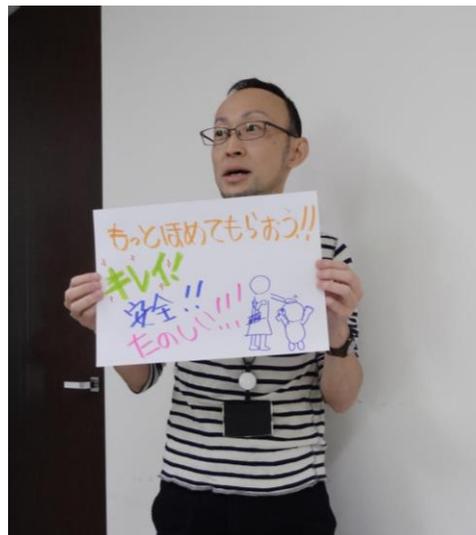
●より多様な人々を巻き込むためのフライヤーづくり

次に、「より多様な人々を巻き込むためには」として、ゴミ問題に興味のない人に興味を持ってもらうためのフライヤーをつくるグループワークを行いました。最初の10分

間で、ゴミ問題に興味のないのはどういう人たちか、ゴミ問題に興味のない人の興味を引くにはどうすればよいかを議論。「ゲーム性、おもしろさが必要」「捨てないことが楽しい、カッコいいというイメージを定着させる」「1964年の東京五輪と同様、2020年に向けて“外の目”を利用する」「ゴミをアートに変身させては」などの意見が出ました。それらを踏まえ、25分間かけてフライヤーづくり。各グループとも、個性的なフライヤーができあがりました。



グループワークの様子



捨てる人を減らすために「そのタバコ2本で死んじゃうワンニャン」という厳しめのメッセージを盛り込んだフライヤー（左）と、いいイメージを伸ばすために「もっとほめてもらおう!!」と訴えかけるフライヤー（右）



今ある組織を活かそうと、「地域消防団から始まる街づくり！」をうたったフライヤー

●路上ゴミの数を可視化する方法とは？

昼食後はいよいよゴミ拾い調査。まず、株式会社ピリカ（以降、ピリカ）代表取締役の小嶋不二夫氏より、どのようにゴミ拾い調査を行うかについての説明を受けました。

ピリカは、ゴミ拾い SNS 「ピリカ」を運営する企業。だれかがゴミを拾ったらそのゴミの写真を SNS に送り、ユーザー同士で共有するという仕組みで、回収されるゴミの量を計測しています。SNS 「ピリカ」は、清掃活動に取り組む個人や団体の活動記録と広報活動のためのプラットフォームとして、世界 77 か国で利用されています。



ゴミ拾い SNS 「ピリカ」について説明する小嶋不二夫氏

さらにピリカでは、SNSとは別に、ポイ捨てゴミの数を計測する調査を実施しています。基本的にポイ捨てゴミの累計数は増加する一方であり、累計数だけではその地域がきれいになったかを判断することはできません。調査前と調査後と比較し、ほんとうにゴミの数が減ったかどうかを見えるようにしないと問題が解決されたとはいえないという難しさがあります。小嶋氏によると、ポイ捨てゴミの数は、場所、季節、時間帯、清掃活動の有無などにより大きく変動すること。これらの特性を考慮したポイ捨てゴミのデータ定量化については、これまでは確立された手法はありませんでした。そこでピリカは、2014年よりゼロから調査手法を整備したのです。東京23区で自主的に行った調査は、テレビで紹介されるなど話題となりました。

●ゴミ拾い調査の方法

今回のワークショップで行われたゴミ拾い調査は、上記の調査ノウハウを活かした方法で、特定の道路にどの種類のゴミがどの程度落ちているのかを数えるものです。3つのグループに分かれて以下の手順で調査を実施しました。

①移動と調査地点の選定

3つのグループは、主催者が予め選定した調査地点（合計20地点）の地図をもらい、それぞれ数ヶ所ずつ分担して担当することになりました。各調査地点の道路全体に落ちているゴミを全部拾って数えると時間がかかりすぎるため、以下のルールを適用して行うことになりました。

- 大通りは道の片側のみを数える
- 大通り以外は道全体を数える
- 車道は歩道から約1mの部分までを数える
- 基本的に歩道のみを数える／歩道から奥まった施設の敷地内の場合は歩道から1mのみを数える
- 次の5つの条件をできるだけ多く満たす長さ10mの範囲を選んで数える
 - 調査をする上で危険がない場所
 - 人やお店に迷惑をかけにくい場所
 - 植込み、側溝がある場所
 - ゴミの集積所やゴミ箱がない場所
 - 交差点以外の場所

②調査

- 写真撮影
調査地点がわかるものとゴミ拾い前の様子がわかるものの2種類
- ゴミ拾いと計測
大分類：「見えやすい場所」「見えにくい場所」、中分類：「タバコ」「ガム」「飲料容器」「その他」の8分類に分けて分類別にゴミの数を計測する
「見えやすい場所」：明らかに路上に落ちているとわかるゴミ
「見えにくい場所」：植込みの中、側溝の中、看板やコーンの影、建物の隙間等に隠れているゴミ
※判断が難しい場合は「見えにくい場所」とする
※落ち葉などの自然のもの、へばりついて取れないガム、建物の中のゴミは対象としない

③調査結果の報告

- 写真提出
- 計測結果の提出

説明後、参加者は、全国でゴミ拾い活動を行っている NPO 法人グリーンバードの協力により提供されたビブスや軍手、トングを身につけ、調査地点に移動してゴミ拾い調査を行いました。



側溝の中にはタバコの吸い殻が落ちていることが多かった



植え込みの中もじっくりとチェック



駅の改札口に近いエリアではたくさんのガムが見つかった



駐輪所では自転車の間もきちんと調査

● ゴミ拾い調査を行って気づいたこと

ゴミ拾い調査終了後は、気づいたことを付箋紙に記入し、グループごとに共有。以下のような点が挙げられました。

- ・基本的にはきれいで、見えるところにはほとんどゴミがなかったが、ある一か所に集中していることもある
- ・ガムとタバコの吸い殻が多く、特に駅近くはガムの数がとても多かった

- ・ 見えない植え込みに缶やペットボトルが多い（わざわざ奥に突っ込んでいる）
- ・ コンビニや居酒屋前はゴミが多く、銀行前などはきれいだった
- ・ 人の目が少ないところのほうがゴミが多い



調査とは別のグループをつくり、気づきの共有を行った

● ゴミ拾い調査の結果は？

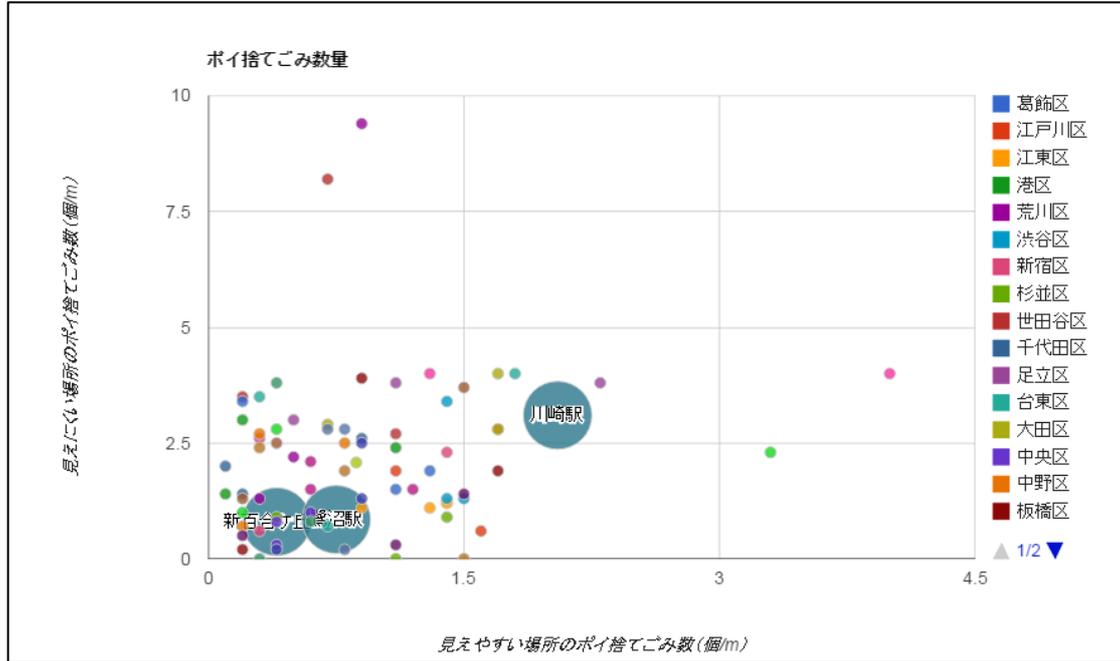
集計が終わったところで、小嶋氏よりゴミ拾い調査の集計結果が発表されました。ゴミの数は、「見えやすい場所」が149個、「見えにくい場所」が164個。川崎駅ではタバコが圧倒的に多かったのですが、鷺沼駅前にはガムが多いのが特徴的でした。また、駅の両側で汚さが違っており、南側のほうがゴミが多い結果となりました。さらに、東京23区各地点と比較して、川崎駅・新百合ヶ丘駅・鷺沼駅の汚さがどの程度かを示すバブルチャートも提示されました。



「見えやすい場所」「見えにくい場所」それぞれのゴミの種類を示した円グラフ



鷺沼駅前のゴミ調査結果を示した地図。緑色のほうがゴミが少なく、黄～オレンジ色のほうがゴミが多いことを表す



ゴミ拾い調査を行った川崎市の3地点では、川崎駅の汚さが群を抜いている

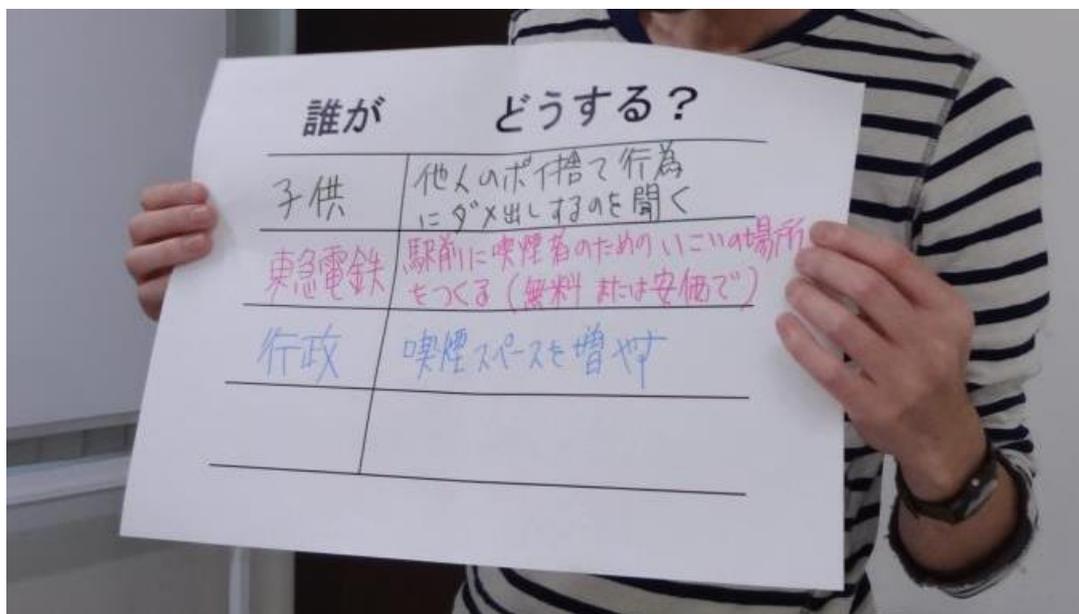
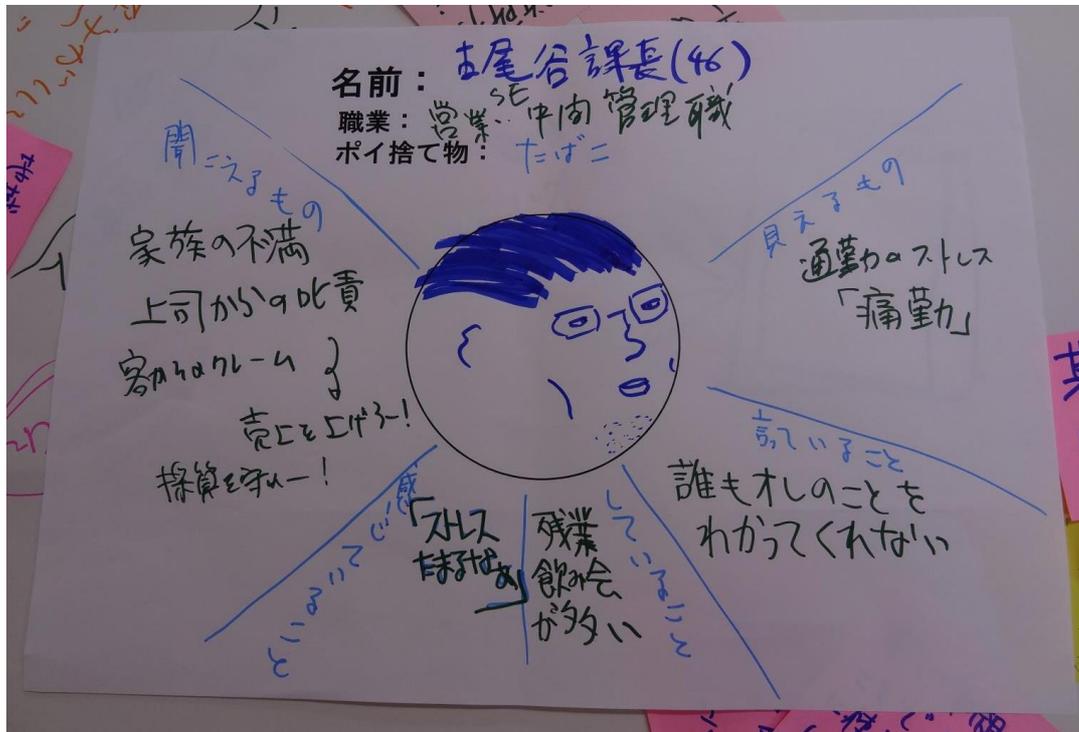
● どうすれば路上ポイ捨てゴミを減らすことができるか？

この結果を踏まえ、路上ポイ捨てゴミを減らすための解決策を考えることに。2つのグループに分かれ、「Empathy Map」と「Who Do?」というゲームを行いました。

ポイ捨てをしている人は、どういう職業で、どんなことを見たり言ったりしているか、どんなことを考えているか、どんな気持ちでいるのかを考えるのが「Empathy

Map)。架空の人物を想像し、名前もつけます。そして、その人物にポイ捨てをやめさせるには、だれがどうすればいいかを考えるのが「Who Do?」です。この2つのゲームを通して、片方のグループが「タバコ」、もう一方が「ガム」について、路上ポイ捨てゴミの解決方法を話し合いました。

「Empathy Map」で生まれた人物像と、「Who Do?」の結果は以下の通り。



タバコ

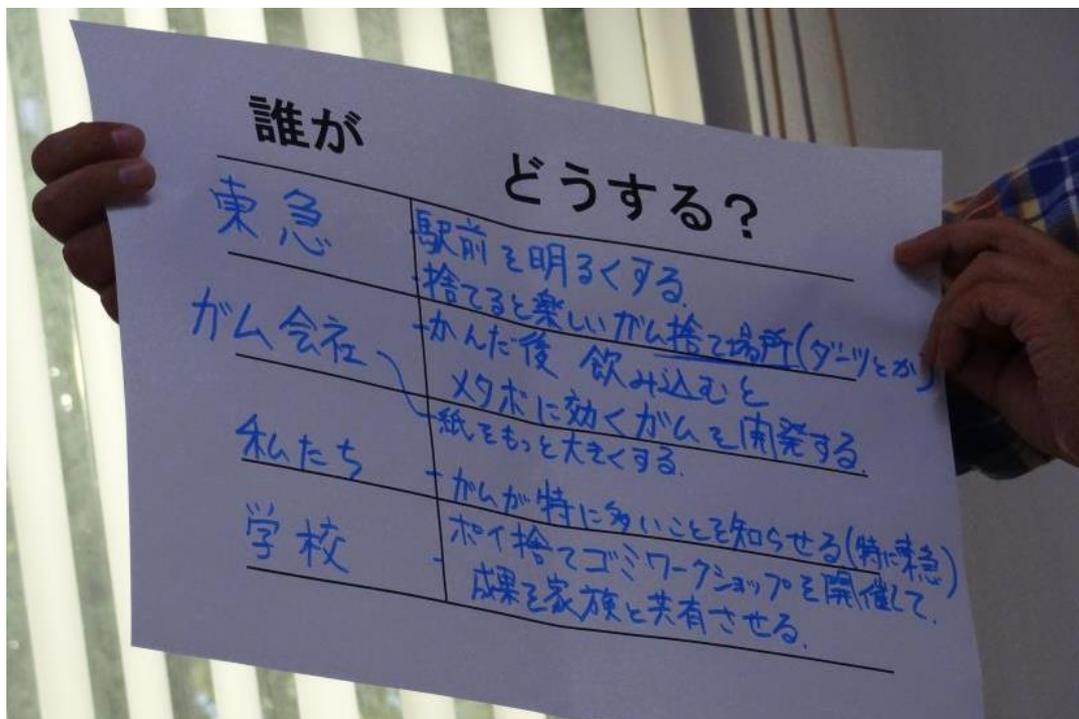
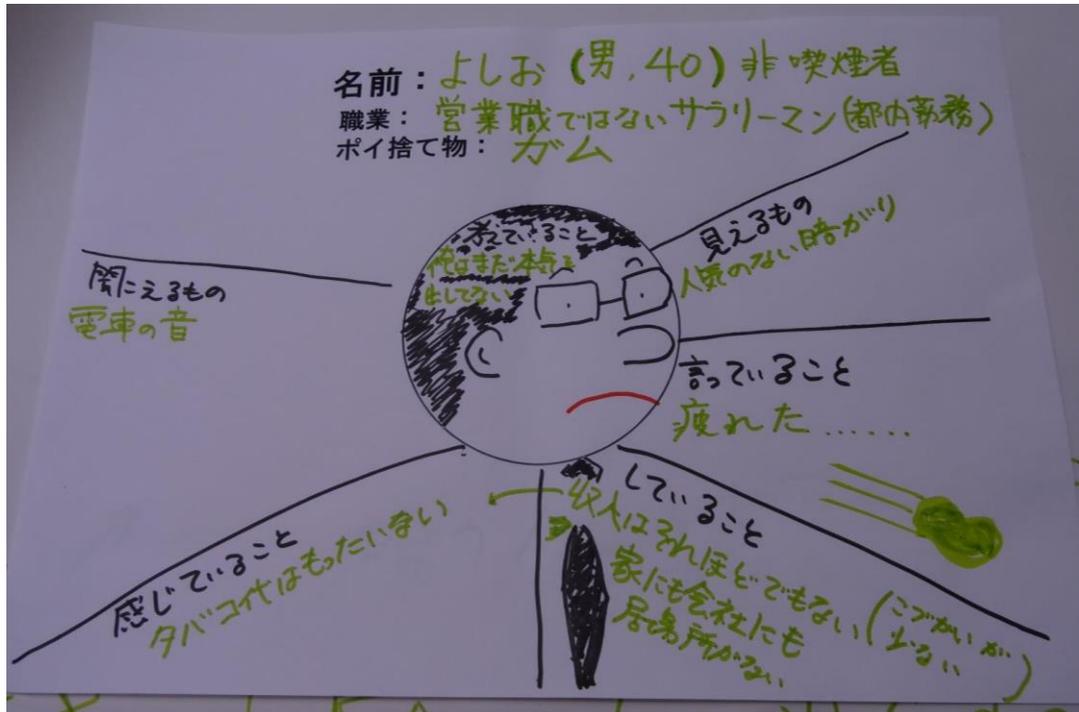
《Empathy Map》

- ・ 名前：古尾谷課長
- ・ 46 歳、男性、営業（SE）、中間管理職

- ・ストレスが多い、残業と飲み会が多い、家族の不満、上司の叱責、客からのクレーム → 「だれもオレの苦労をわかってくれない」

《Who do?》

- ・「子供」が「他人のポイ捨て行為にダメ出しするのを聞く」
- ・「東急電鉄」が「駅前に喫煙者のための憩いの場をつくる」
- ・「行政」が「喫煙スペースを増やす」



ガム

《Empathy Map》

- ・名前：よしお
- ・40歳、男性、営業職ではないサラリーマン、非喫煙者
- ・収入がそれほどなく小遣いが少ない → タバコ代はもったいない
- ・家にも会社にも居場所がない
- ・「疲れた……」

《Who do?》

- ・「東急」が「駅前を明るくする」「捨てると楽しいガム専用ゴミ箱をつくる」
- ・「ガム会社」が「噛んだ後に飲み込むとメタボに効くガムを開発する」「ガム捨てるの紙をもっと大きくする」
- ・「私たち」が「ガムのゴミが多いことを知らせる（特に東急に）」
- ・「学校」が「子供に向けてポイ捨てゴミワークショップを開催して、成果を家族と共有させる」

●ワークショップに参加して

最後に、1日を通しての感想を一人ずつ述べました。参加者の声を紹介します。

- ・鷺沼駅の汚さは川崎駅と新百合ヶ丘駅の間程度だと予想しており、その通りの結果だったが、ガム問題という予想外の特徴が浮き彫りになっておもしろかった。どこでもタバコが一番多いと思っていたが……。実際に調査してみると新たな発見がある。
- ・自分の住む町にもっと目を向けようと思えた。他の場所についても知りたい。
- ・地元でこれだけガムが多いことにびっくりした。集計結果の地図がおもしろく、知らないこと・気づいていないことをデータで見せてもらえてよかった。
- ・基本的に日本はきれいだが、よくよく探してみるとゴミがあることがわかった。
- ・意外にゴミが少ないと思った。実際に歩いてみて楽しかった。子どもの総合学習にもよいのでは。
- ・何がゴミなのか判断するのが難しかった。総合学習ももちろんだが、学校の授業参観で親子一緒にやるとよいと思う。

●今後に向けて

今回の調査を終えて、川崎、新百合ヶ丘、鷺沼と3地点のデータがそろいました。今後は、このデータを使ってさまざまな展開を考えているとのこと。来年の2月には、これまでの3回の調査結果を踏まえた4回目のワークショップが開催される予定です。

(執筆：小島まき子)



集めたゴミと一緒に、参加者みんなで記念撮影